

## 東魯における杜甫と李白の交友およびその詩について

著者	上田 武
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	46
ページ	14-25
発行年	1988-06-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00149885">http://doi.org/10.15068/00149885</a>

# 東魯における杜甫と李白の交友およびその詩について

上田 武

## 一

「わが国の四千年の歴史の上で、孔子と老子との出会い（もしそれが事実だとすれば）を除いて、これ以上重大で、神聖で、記念すべき二人の人物の出会いはなかった。たとえてみればそれは大空で太陽と月が鉢合わせしたのに似ている。」

天寶三載（七四四）の杜甫と李白の出会いについて語る聞一多のことは、今日でもなお彼の感動を生き生きと伝える迫力があふれている。<sup>(1)</sup>

二人の交友の経過やその文学史的意義については、先学によってすでにさまざまな見解が提起されてきているが、<sup>(2)</sup>基本的な枠組みはやはり聞一多の「少陵先生年譜会箋」に求められなければならないといえよう。ここではまず聞氏の「年譜会箋」を再整理することを通して、杜甫と李白の交友経過のあらましをたどり、更に事実の特定に関する若干の問題点を付加しておくこととしたい。

○ 天寶三載（七四四）甲申

三月——李白（四十四歳）、いわゆる「賜金放還」により長安を出て東に向かう。

三〜五月の間——杜甫（三十三歳）と李白、東都洛陽で出会う。

五月五日——杜甫の継母范陽太君（杜審言の後妻）、陳留（今の開封市の東南郊）の私邸で死去。

五月中に——李白、大梁（当時は汴州と呼ばれた。今の開封市）に到着。ただちに陳留の採訪大使の従祖李彦のもとを訪れ、北海（今の山東省益都県）の高天師から齊州（今の山東省斉南市）の紫極宮で道録を授与してもらうことを依頼。

八月三十日——杜甫、范陽太君を洛陽東郊の偃師に葬り、墓誌を執筆。

仲秋から晩秋にかけて——兩名、大梁から宋中（今の河

南省商丘市)に遊び、高適を加えて吹台、琴台等に登り、孟諸沢での遊獵を楽しむ。

晩秋——杜甫、洛陽を経て黄河を渡り、王屋山に道士華蓋君を訪ねるが、すでに死去したあとであった。

同じ頃——李白、北海の高天師から道籙を授与される。

○ 天宝四載(七四五)乙酉

おそらく年の代る頃——李白、魯郡(今の山東省南部の兗州市)の妻子の家に戻る。

夏——杜甫、齊州に遊ぶ。齊州司馬に李之芳が就任したことを機に、之芳の親族である李邕が来齊。杜甫は彼らに従い、歴下亭、鵲山湖亭等のいわゆる「齊州の会」に陪席する。

秋——杜甫、東魯の李白を訪ね、深い交友を結び、魯城の北郊の范隱居をもとに訪ねたりした。

仲秋の頃——杜甫が西に帰るにあたり、魯郡の東石門での送別の宴。

以上が聞氏の「年譜会箋」に基づく二人の交友のあらましであるが、聞一多説を軸として展開されてきた諸論議の中で、事実の特定に関して特に注目すべき見解としては次のものをあげることができよう。

A 出合いの時に關して

1、詹鍇「李白詩文繫年」——出合いの時は天宝四載夏であり、聞氏の「会箋」の記事をそれぞれ一年ずつ後に下げた方がより整合的である。

2、郁賢皓「李杜交友新考」——出合いの時は天宝三載の八月を過ぎた仲秋の候である。

B 出合いの場所に關して

1、郁賢皓「李杜交友新考」——出合いの場所は東都洛陽ではなく、洛陽から東へ百七十五キロの大梁か、あるいは更に更にその東百二十五キロの宋中(宋州)かのいずれかである。

詹鍇氏の見解は極めてユニークといえるが、宋中の琴台に遊んだことをうたう高適の詩が、いわゆる「梁宋の游」とは無関係だとする解釈や、「賜金放還」の後約一年間長安付近を遊歴したとする李白の行動の跡づけは何としても不自然さを免れない。このことについては別に郁賢皓氏からの批判も出され、詹説は基本的に否定視される傾向にあるのが実際である。また杜甫と李白の出合った場所が洛陽だとするのは南宋以来「定説」とされてきた認識であるが、聞一多自身もことわっているように資料的裏付けのない一種のあて推量であった。この点に關する郁賢皓氏の指

摘は李白の長安入京が二度か三度かという最近の中国学界での論争の過程で提起されたものであり、論争の深化とともに、これまでの定説の基本的な検討を迫る重さを有しているといえよう。

論争点として取りたてるまではゆかないが、出合いの場所と場所以外に、先学の見解の中で相違の見られるのは次の諸点である。

1、杜甫の王屋山の華蓋君訪問の時期と、それに李白が同行したか否か。

2、二人が遊覧した梁園等の古跡は今の開封市か商丘市か。

3、李白が高天師に道籙を授けられた時期と、それに杜甫が同行したか否か。

4、李邕を中心とする齊州の会に李白も同席したか否か。

これらの点は2を除いては資料面から客観的にとらえることは不可能であり、推測のレベルで、二人の交友期間のいづれかに位置づけるより仕方のないものであり、その意味からして基本的には聞一多の「会箋」に従っておいてさしつかえないといえよう。

このように見えてくると、二人の交友にかかわる出来事

で、事実として時期を特定できるのは、「梁宋の遊」と、魯城（今の山東省兗州市）を中心とした東魯（今の山東省の西南部）での交わりの二つに絞られるということになる。この二つの場面はともに二人の作品に形象化されているものであるが、「梁宋の遊」は二十数年後の杜甫の「昔遊」や「遣懷」で描かれており、そこには当然追憶にまつわる美化や風化の要素が加わっているはずである。それに対し東魯での交りは、そこでの現在の時点における兩名の作品が残されており、二人の個性や詩人としての資質を比較検討するうえで、極めて貴重な意味を持つ場面であると思われる。

## 二

天寶四載の初秋から仲秋にかけての東魯における杜甫と李白との交遊の中には、その地の道士たちとの接触が大きな比重を占めていたと思われる。李白が東魯のいづれかに妻と一男一女の住む家庭を構えていたことは、「寄東魯二稚子」「送楊燕之東魯」「送蕭三十一之魯中、兼問稚子伯禽」および「贈武十七諤并序」等の詩によって知ることができる。諸家の年譜によれば、三十五六歳の頃の李白は齊魯の地に遊んでおり、『旧唐書』文苑伝が「李白、字は太

白。山東の人」と記し、杜甫その人が安史の乱に際会した当時の「蘇端薛復筵薛華醉歌」で、「近来海内為長句、汝与山東李白好」とうたうところからしても、事の詳細はつまびらかでないにしても、山東の地に李白の生活の重要な拠りどころがあったことは確実視できよう。『李太白全集』には時期は不明であるが、かなりの数の東魯での作品が見える。それらの多くは魯城を中心とした地方官吏たちとの応酬であるが、中に六首ほど次のようなその地における隠逸の士との交流の場での作がある（下の数字は王琦注の『全集』の巻数）。

「西岳雲台歌、送丹丘子」(7) 「送方士趙叟之東平」

(16) 「魯城北郭曲腰桑下、送張子還嵩陽」(16) 「送范山

人婦太山」(17) 「五月東魯行、答汶上翁」(19) 「尋魯城

北范居士失道、落蒼耳中、見范置酒摘蒼耳作」(20)

右の最初の詩題に見える丹丘子すなわち元丹丘は李白にとってとりわけ重要な意味を持つ人物であった。元丹丘と李白との交際は並なみならぬものであったらしく、有名な「將進酒」で「岑夫子、丹邱生」と呼びかけているのをはじめ、『全集』中詩題にその名が見える作だけでも十二首の多きに達している。『頴陽別元丹邱之淮陽』で「吾將元夫子、異姓為天倫」とうたうように、時に李白は丹丘を異

姓の兄弟だとさえ称している。彼が翰林供奉として玄宗の宮廷に招かれたのは、道士吳筠の手引を通して面識を得た玄宗皇帝の妹玉真公主のなかだちによるという『旧唐書』文苑伝に基づく従来の説に対し、近頃の安旗氏は「秋日煉藥院鑷白髮、贈元六兄林宗」の元林宗が実は元丹丘であると、この詩と「風箏篇」とに基づいて、玉真公主に李白を推薦したのは吳筠ではなく丹丘であると考証している。安旗氏や郁賢皓氏の見解を踏まえていえば、李白と丹丘はともに蜀の地で十五歳の頃から神仙への道に志して切磋琢磨し、よしみを深めてきた莫逆の友であった。当時最も高名な道士の一人として朝廷へも出入しながら、興趣のおもむくまま各地の名山を遊歴していたのが、李白の作品を通して浮びあがってくる元丹丘の像である。そして天宝十一載(七五二)の作とされる杜甫の「玄都壇歌、寄元逸人」が「故人昔隱東蒙峰、已佩含景蒼精龜」とうたうことからすれば、杜甫と李白が東魯に遊んだちようどその時、元丹丘も魯城や曲阜のまま東に位置する東蒙山に廬を結んでいたことが知られるのである。

前記の『旧唐書』文苑伝はまた李白について「父、任城の尉と為り因りて焉に家す」と記す。任城は今の山東省済寧市であるが、岡村繁氏はこの父なる人は安陸での妻許氏

の実父、李白にとつては義父に相当し、三十五六歳頃の定職のなかつた李白は、東魯の地方としては上級官僚である義父に従つて妻子とともに取りあえずそこに移り住んだのではないかと考証されている。<sup>(15)</sup>前後二回にまたがる東魯時代の李白の作品に、前記のように地方官吏との応酬が多いのは、この点からすればうなずけるところである。『旧唐書』は右の文の後更に「少くして魯中の諸生の孔巢父、韓準、裴政、張淑明、陶沔等と徂徠山に隠れて酣歌縱酒し、時に竹溪の六逸と号す」と続いてゆくが、前後二度の滞在中、李白は一方では自身の名声や義父の縁故によつて在地の官界とも交わりながら、他面東魯の有名無名の隠士たちと放歌高吟の自由な生活を楽しんでいたことが想像される。隠者との交流の作品に登場する前記の范居士、趙叟、張子、汶上の翁といった人たちは、李白の遊仙趣味を満足させる無名隠士の一群に属していたのであろう。

李白の東魯における生活の仕組みが以上のようなものであったことから当然導き出される結果であるが、大先輩李白とそれに従う杜甫との交友を基本的特徴づけるのは、共に神仙の道を求める道友としての交わりである。もちろん李白の場合、神仙への関心は生涯を通じてその人となりや文学の本質的な構成要素をなすものであった。だが

杜甫にあつては、神仙への憧憬は平常のものではなく、この一時期の詩（たとえば二首の「贈李白詩」）に限つてその傾向が色濃くあらわれており、それが李白の圧倒的影響に基づくものであるということはすでに共通の認識とされるところである。また先輩である李白に対する杜甫の人間理解、尊敬の質については、はじめの出合いの段階では、李白の強烈な個性、とりわけ常人とかけ離れた道骨の風貌に圧倒されていたものが、志を同じくする道友として後に従つて歩いている間に、次第に詩人としての李白の眞価を理解するようになり、その理解を基とする杜甫の友情は、別離の後も時とともに深められ、晩年の李白が永王璘の事件に連座して罪人とされた時に最高に灼熱したことは、主として吉川幸次郎氏によつて説き明らかにされている。

李白にかかわる東魯時代の杜甫の詩は、後に触れる「与李十二白同尋范十隱居」と「飛揚跋扈為誰雄」の句で有名な「贈李白」の二首のみであるが、前記の「玄都壇歌」をあわせて見るならば、元丹丘を軸とした李白をめぐる隠士たちの人脈に接触し、神仙の道への興味と関心がこの期間に更に高まったことは明らかである。神仙への憧憬は杜甫の平常ではなく、この一時期に限られたものというこれまでの定説は、全体的には確かにその通りではあるが、「玄

都壇歌」や王屋山に華蓋君を訪ねた日の思い出を鮮かない  
メージにこめてうたう大曆三年（七六八）頃の「憶昔行」  
などからすれば、その後も杜甫の心に生き続け、折に触れ  
て激しく燃えあがるものであったことも注目しておくべき  
点であると思われる。

三

東魯の地における杜甫と李白の交友を最も具体的に物語  
るモニユメントは、いうまでもなく魯城の北郊の范居士な  
る隠士の幽居を訪問した折の、兩名それぞれの次のような  
五言古詩である。

與李十二白同尋范十隱居

李侯有佳句

李侯には佳句有り

往往似陰鏗

往往にして陰鏗に似たり

餘亦東蒙客

余も亦東蒙の客となり

憐君如弟兄

君を憐しむこと弟兄の如し

醉眠秋共被

酔ひて眠るに秋は被を共にし

携手日同行△

手を携へて日びに同に行く

更想幽期處

更に幽しき期をみたす処を想ひ

還尋北郭生

還た尋ぬ北郭の生

杜甫

入門高興發 門に入れば高興發り  
侍立小童清 侍立せる小童は清かなり  
落景聞寒杵 落ちゆく景に寒き杵を聞き  
屯雲對古城△ 屯き雲は古城に對す  
向來吟橘頌 向來吟むは橘頌  
誰欲討蓴羹 誰か蓴羹を討めんと欲する  
不願論簪笏 簪笏を論ずることを願はず  
悠悠滄海情 悠悠とはるかなり滄海の情

尋魯城北范居士、失道落蒼耳中、見范置酒摘蒼耳作

李白

雁度秋色遠 雁は度りて秋色遠に  
日靜無雲時 日靜かにして雲の無き時  
客心不自得 客の心自づと得はず  
浩漫將何之 浩漫とあてなく將に何にかかんとする  
忽憶范野人 忽ち憶ふ范野人の  
閑園養幽姿 閑園に幽姿を養ふを  
但恐行來遲 但だ恐る行く來の遲きを  
城壕失往路 城壕にて往路を失い  
馬首迷荒陂 馬首は荒れたる陂に迷ふ  
不惜翠雲裘 翠雲の裘の

遂爲蒼耳欺  
入門且一笑  
把臂君爲誰  
酒客愛秋蔬  
山盤薦霜梨  
他筵不下筋  
此席忘朝飢

遂に蒼耳の爲に欺かるるを惜しまず  
門に入るや且つ一笑  
臂を把りて君は誰と為すかと  
酒客は秋蔬を愛するがゆゑに  
山盤に霜梨を薦む  
他の筵にては筋を下さざるも  
此の席のゆゑに朝飢（翌朝の空腹感）を  
忘れん

酸棗垂北郭  
寒瓜蔓東籬  
還傾四五酌  
自詠猛虎詞  
近作十日歡  
遠爲千載期  
風流自簸蕩  
謔浪偏相宜  
酣來上馬去  
却笑高陽池

酸棗は北郭に垂れ  
寒瓜は東籬に蔓はる  
還た四五酌を傾け  
自ら詠ずるは猛虎の詞  
近くは十日の歡を作し  
遠くは千載の期を爲さん  
風流自づと簸蕩  
謔浪偏へに相ひ宜ろし  
酣來馬に上りて去らんとし  
却って笑ふ高陽の池を

晩秋の郊外の風景や門をくぐって山荘に入ってゆく情景  
が共通している点から、右の二首が同行の折の作であるこ

とはほぼ確實といえる。同行の場面であることを前提とし  
たとき、杜甫と李白の人柄と、交友におけるそれぞれの姿  
勢の相違が鮮明に迫ってくることは、聞一多が評伝「杜  
甫」の末尾で小説的に描写している通りである。杜甫の李  
白に対する強い親愛の情の中には、「贈李白」二首には見  
られない詩人としての李白への尊敬がはつきりとあらわれ  
ている。また俗塵と訣別して高潔な修道の生活に生きるた  
めに、これまでひたすら志向してきた官僚へのコースを放  
擲しても悔いはないと言いつ切るその歌いぶりからは、「道  
士」李白の影響をまともに受けとめようとする杜甫の馬鹿  
正直なまでの誠実さを読みとることができよう。これに対  
して李白の眼中には杜甫は存在しない。生涯を放浪者とし  
て過ごした李白は、ここにおいても自身の押さえようのな  
い「客心」をみたくするために、矢も楯もなく范十の山荘をた  
ずねてゆくのであって、同行者である杜甫は、彼にとつて  
単なる従順で気のおけない若い友人に過ぎなかつたのであ  
る。泥酔のあまり帽子を逆さにかぶつたという晋の山公に  
みずからをなぞらえる李白の対人姿勢は、まさに傍若無人  
の自由闊達さであるといえよう。

ところで同行の折の作か否かの問題をひとまずおいてこ  
れらの詩を読んだ場合、同じ五言古詩のスタイルをとりな



がら、二人の詩の表現の方向に画然とした違いが認められることは、最も注意されなければならない点であろう。まず杜甫の詩は作者の視線が過去、現在、未来へと等分に向けられていることが指摘できる。この詩は意味の上から△印の箇所まで三つに区分されるが、第一段は李白に従って東魯に來遊した直前の過去のこと、第二段は范十の隱居を訪れた現在の時点が、第三段は自身のこれからの生き方に対する決意がそれぞれうたわれている。われわれがみずからの人生経験について何事か思いをめぐらす場合には、まず過去をかえりみつつ現在を確認し、更に未来への展望をうち立ててゆくというのが基本的な思考形式である。そのような時間の経過に即して身辺の事象に目を向けてゆく精神活動において、対象についての観察がより冷静であり克明であるならば、思考の全体の過程は一層深化され、理性的なものとなってゆくといえよう。ここでの杜甫の詩の場合、例えば「李侯有佳句、往往似陰鏗」には先輩李白の作品を冷静に評価する詩人としての目が光り、第二段の「落景聞寒杵、屯雲對古城」では、砥ぎ澄まされた聴覚と視覚とが、晩秋の夕暮れの風物を極めてリアルに写しとっている点が指摘できる。このような時間の経過の中で対象を克明に見つめる視線の輝きがあるからこそ、第三段において

の新しい生き方を目指す決意表明が、人生におけるひとつの理性的な選択にふさわしい重厚な響きをもって読者に迫ってくるのだと考えられるのである。

これに対し、李白の詩は徹頭徹尾「現在」の連続である。詩の冒頭部分から自身の押さえることのできぬ感情の奔騰がうたわれ、その衝動のおもむくままに、城外の蒼耳の草むらに迷い入る経緯、更に山莊の主人のもてなしにあずかりながら、次第に酒と詩の興趣に心をひたしてゆく過程が、絶え間ない「現在」の連続として、主情的に表現されてゆく。李白の表現においては、その時その時の自己の心情が先行し、外界の事象はその心情を吐露するためのメディアとしての役割を担わされているに過ぎない。現在という瞬間の自身の感懐の表出にのみ忠実な李白の意識には、杜甫はもちろん、手厚く接待してくれる范十の姿すらほとんど映っていないかと思われるのである。<sup>(17)</sup>

そして、李白のこのような作詩における発想は、東魯での杜甫とのかかわりに取材した他の二つの作品にも共通して認められるものである。そのひとつは送別詩「魯郡東石門送杜二甫」である。

醉別復幾日

登臨偏池臺

何時石門路

重有金樽開

秋波落泗水

海色明徂徠

飛蓬各自遠

且盡手中杯

もうひとつは別れて間もない杜甫を懐しむ「沙邱城下寄杜甫」である。

我來竟何事

高臥沙邱城

城邊有古樹

日夕連秋聲

魯酒不可醉

齊歌空復情

思君若汶水

浩蕩寄南征

別れんとして別れがたい胸を衝きあげてくる惜別の情、

あるいは別れたあとの一種のアンニュイを伴った、何ともいえぬ喪失感が詠む者に迫る、二首ともに傑作と称し得る詩である。だが李白がうたうのはやはり現在ただ今の自身のやるせなさだけであり、杜甫その人の姿ではない。そして以後の李白の詩からは杜甫にかかわる一切は消失する。

他方、杜甫の李白に対する留別の詩は残されていない。

しかしおそらく別れの年である天宝四載年末の作「冬日有懷李白」から大曆元年（七六六）の「昔遊」―「遺懷」まで、二十一年もの間に直接李白に寄せる詩、及び一部に李白に

触れた詩を杜甫は十二首作っている。そしてそれらの作品はいずれも基本的には天宝三、四載の交友とそれ以後の互いの風雪の体験を踏まえながら、現実の生きざまを見据え、更にこれからの運命に思いをいたす発想に貫かれたものである。

魯城北郊での杜甫と李白の詩は、この偉大な二人の詩人が神仙への憧憬を共同の紐帯としながら、ほぼ同時に制作したという意味で、まさに千載一遇の作と呼ぶにふさわしいものである。この二人の詩の表現の仕方 of 大きな隔りは、それぞれの文学の本質的な相違を示す標識としての意味を持つことはこれまでに見てきた通りであるが、それはまた同時になま身の人間としての二人の資質の違いをも示していると考えられる。李白の場合、制作の時点での激しい感情の燃焼、あるいはそれへの陶酔は、華麗なイメージと融けあって彼の文学を成立させる核としての役割を果たす一方、なま身の人間としての李白に必然的に自己中心的な姿勢をとらせる働きをもたはらずである。送別詩、留別詩は李白文学の独壇場といふべき領域であるが、惜別の情の美しい燃焼はあっても、相手その人への人間的な関心度は決して高いとは認められない。東魯での交友はこまやか

であっても、李白の心中においては、遙か後輩の杜甫は、元丹丘や賀知章や孟浩然の何分の一の比重をも占めていなかったであろう。杜甫と別れたあとの李白の眼前には、うたわなければならぬ「現在」が目まぐるしく次つぎと生起し、杜甫の存在は間もなく李白の意識から薄れ去っていったのに違いない。

しかし時の流れに即し、みずからの生きざまにかかわらせながら対象を見据えようとする杜甫にあっては、対象への関心度はむしろ時とともに深まる性質のものであったと考えられる。李白にかかわる十二首の詩篇は、杜甫の李白に対する友情が、別れたままの二十一年の間、次第に痛切さを増していったことを物語っている。そのような長期にわたる持続と深化は、何よりも杜甫が時代や人生の来し方将来についてのたゆむことのない誠実な省察のなかで、李白の人と文学を克明に見据え続けたこと、つまりは思想的な深みにおいて人間李白をとらえようとした結果にほかならないと思われるのである。

(註)

(1) 「杜甫」〔聞一多全集〕第三卷、「唐詩雜論」、初出は『新月』一卷六期(一九二八)

(2) 吉川幸次郎『李白と杜甫』〔全集〕第十二卷、高島俊男

『李白と杜甫』(東洋人の思想と行動、一九六二)、小川昭一「杜甫の交友」(無窮会『東洋文化』二号、六五)、渡辺英喜「李白と杜甫の交友についての一考察」(二松学舎大『中国文学論考』一号、七三)、黒川洋一「杜甫の研究」七七、詹鏞「李白詩文繫年」五七、郭沫若「李白与杜甫」七一(邦訳・須田禎一「李白と杜甫」七五)、馮至「杜甫伝」七九(邦訳・橋川時雄「杜甫・詩と生涯」七七)、陳貽歙「杜甫評伝・上」八一、安旗「李白・縱横探」八一、周蒙、馮宇「杜甫」(中国古典作家叢書)八二、安旗、薛天緯「李白年譜」八二、田世彬「杜甫・贈李白詩義辨(兼談「樽酒論文」)」(『草堂』八二、二期)、郁賢皓「李杜交友新考」(『草堂』八三、一期)などが管見に触れたものである。

(3) 詹氏は聞一多の三載説の決め手が、「梁宋の游」に同会した高適の一連の作品(「東征賦」の「歳在甲申、秋窮季月、高子游梁既久、方適楚以超忽」の句、「宓公琴台」詩序の「甲申歲、適登子賤琴台」の句、「宋中別周梁李三子」の句など)に置かれていこと、それが錢謙益の『杜工部集箋注』に基づいたものであることを指摘する。高適の詩は三載甲申の晩秋、彼が宋中の琴台などに遊び、李姓の人物等と別離の宴を催したことを取りあげているが、詹氏はそこに登場する李ながしが李白であるとは必ずしも断定できないとする。そしてむしろ杜甫、李白とも従来の諸年譜では天宝五載が空白となっていることに注目し、聞氏の「会箋」の記事を一年ずつずらすべきだと主張する。詹氏の『繫年』での李白は、三載春の「賜金放還」の後、

那（今の陝西省郿県）岐（同じく鳳翔県）坊（同じく中部県）などの諸州に遊び（「登太白峯」「登新平樓」などに基づく）、あくる四載の春一旦長安に戻つたうえで（「以詩代書答元丹丘」に基づく）、あらためて商州を経て東に旅立っている（「過四皓墓」「商山四皓」などに基づく）。また一方の杜甫の足跡については、范陽太君の葬儀以外は一切不明であるが、それは史伝、作品などの資料が残されていないためだとされる。

(4) 杜甫と李白の出合いの時間については、古く明の顧宸の『杜律注解』に天宝三載の八月とする説があり、仇兆鰲の『杜詩詳注』（贈李白）の項もそれを肯定的に紹介している。顧氏の説の根拠は李白の長安追放を八月とする点にあったが、聞一多は追放は八月ではなく三月であるとし、その「梁園吟」に「五月不熱疑清秋」とうたうように、五月にはすでに梁宋の地に着いているから、旧曆三月から五月の間に二人の出合いがあったと結論づけている。これに対し李白が再度長安に入京したという立場をとる郁賢皓氏は、出合いが仲秋の頃であったという説を次のように展開する。すなわち李白は天宝三載の暮春長安を離れて東に向かったが、彼の選んだコースは、船便により黄河を下ることもなく、華州、潼関を通じて洛陽に直行する黄河南岸の陸路でもなかった。「答杜秀才五松山見贈」詩の「角巾東出商山道」、「別韋少府」詩の「西出蒼龍門、南登白鹿原、欲尋商山皓、猶戀漢皇恩」などによれば、彼は長安から東南に通ずる街道に出て、四皓の伝説で有名な商山を経て、南陽に向かったものと判断される。当時南陽には事に坐して監察御史を被免

された趙悦という人物が閑居の生活を送っていた。趙悦はのちに宣城郡の太守となるが、後年の李白の「贈宣城趙太守悦」詩の「憶在南陽時、始承國士恩」からすれば、李白はここで初めて趙悦に面識を得、國士としての礼をもって遇されたことが判る。おそらく彼は一定の期間南陽に逗留したあと、洛陽には寄らずにまっすぐ東北の梁宋の地に向かったのであろう。一方「梁園吟」の冒頭には「我浮黄河去京関、挂席欲進波連山」と長安から船で黄河を下って梁宋の地にもむいた情景がうたわれているが、郁氏はこの「梁園吟」が作られたのは李白の第一回目の長安入京の開元十八年（七三〇）の折のことだとする。（郁賢皓「李白初入長安事迹探索」『中國古典文學論叢』第一輯にこの点に関してより詳細な記述があるとの由）。特に出合いの季節が仲秋であるというのは、杜甫の側の事情に基づいた判断であり、杜甫が范陽太君の葬儀万端をすませたのは八月末日から九月に入っている頃で、この間陳留と偃師との往復にあわせ、当時の士大夫としての服喪の礼もあったであらうし、洛陽に出むくだけの余裕が杜甫にもますなかつただろうというのが郁氏の推測である。

(5) 郁賢皓「李白兩入長安及有關交游考辨」（『南京師院學報』七八年四期。同氏著『李白叢考』八二年に修訂再録）

(6) 南宋初めの郭知達編注になる『九家集注杜詩』の「贈李白」に、趙次公の「時白方在東都、將游梁宋而往也」および鮑彪の「白時得還、与公同在洛、將適梁宋也」の注文が見える。

(7) 聞一多の前掲「杜甫」

(8) 郁氏の前記論文、および同氏の「李白三入長安質疑」(『中華文史論叢』八四)、「李白与張垌交游新証」(『南京師院學報』七八、一期)、稗山「李白兩入長安辨」(『中華文史論叢』二輯)、安旗「李白三入長安別考」(『人文雜誌』八四、四期)、李從軍「關於李白三入長安質疑的質疑」(『唐代文學論叢』八七、九期)など。

(9) 岡村繁「李白とその妻子たち」(『古田教授退官記念中國文學語學論叢』八五)に詳細な考察が見える。

(10) 例えば「贈任城主簿」「贈范金鄉二首」「贈丘王少府」「東魯見狄博通」「魯郡堯祠送寶明府華還西京」「送魯郡劉長史還弘農長史」など。

(11) 「西岳雲台歌」は詹鏐『詩文彙年』では、天宝三載李白が華山に在って元丹丘の東游を送った作とされ、復旦大學編『李白詩選』では、天宝五載越の地で元丹丘が華山におもむくのを送別する作とされる。しかし郁賢皓「李白与元丘交游考」(『李白叢考』)はその第九句「東求蓬萊復西帰」が元丹丘が長安から東蒙山に来て道術を修めたあと、ふたたび西の華山に戻ってゆくことを歌ったものとする。ここでは郁氏の見解に従う。

(12) 「西岳雲台歌」「元丹邱歌」「聞丹邱子於城北宮石門幽居」「穎陽別元丹邱之淮陽」「以詩代書答元丹丘」「酬岑勛見尋、就元丹丘、對酒相待、以詩見招」「与元丹丘方城寺談玄作」「尋高鳳石門山中元丹邱」「觀元丹邱巫山屏風」「題元丹邱穎陽山居」「題嵩山逸人元丹邱山居」「題元丹丘山居」

(13) 安旗「元丹丘薦李白入朝說」(『唐代文學論叢』九期、八七)

(14) 郁氏の前掲「李白与元丹丘交游考」

(15) 岡村氏前掲論文

(16) 李白を陰鏗になぞらえることについて、聞氏の「杜甫」や和田利男氏の『杜甫——生涯と文學』八一などは、さほどの敬意を捧げたものでなく、杜甫が李白の真価を十分認識していなかった結果であるとする。しかしその判断が当を得ておらず、杜甫が陰鏗に深く私淑していたことは、吉川幸次郎「杜甫と陰鏗」(『全集』第十二卷)の詳細な記によつて明らかである。

(17) 一面このような時間の経過に即して場面を連続的に展開させてゆく表現方法が、予想外の効果、つまり写実性をこの詩に色濃く帯びさせる結果となつていふことには注目する必要がある。この詩の写実性については陳貽焮氏の『杜甫評伝・上』にも鋭い指摘があるが、半日以上にわたる時間の流れの中で、李白自身の行動だけでなく、その風貌から内面の心の波立ちまでも驚くほどの的確さで写し取つてゆく表現の仕方は、彼の全作品中で稀少の例に属することは殊に重要視しなければならぬであろう。

(山梨県立吉田高校)